



國 民 文 庫

第 貳 編

歐 米 名 家 詩 集
中 卷

大和田建樹輯譯

東京 博文館藏版



歐米名家詩集

中卷

東京博文館藏

明治三十六年 八月中の

暑者復燒 如平頃

根岸 里明存之宿

田中 秋月



大森田重樹輯譯

歐米名家詩集

卷中

東京 博文館藏版

大和田建樹輯譯

歐米名家詩集

卷中

東京 博文館藏版

歐米名家詩集中卷目次

人生七期(シェークスピア)	一	丁
羽林姫(キヤムベル)	七	丁
戀人に(ユーゴ)	十	六丁
宿屋の下女(サウシー)	十	九丁
春の頌(コーンウチール)	卅	七丁
死美人(ブラウニング夫人)	四	十丁
橋(ロングフェロー)	四	十七丁
初旅(モンロー)	五	十五丁
彌生(ブライアント)	六	十丁
静けき夜半(モリア)	六	十六丁

舟子(ロージャース).....	六十八丁
母待つ子(ウチツウチース).....	七十四丁
獨(バイロン).....	八十四丁
母の肖像を贈られし時(クーパー).....	八十六丁
緑村(テロー).....	九十四丁
知りそめし嘆き(ヒーマンス夫人).....	九十八丁
貧女の嘆き(ウチツウチース).....	百二丁
デリーの砂道(キングスレー).....	百四丁
小羊(ウチツウチース).....	百八丁
カサピアンカ(ヒーマンス夫人).....	百廿丁
故郷の別れ(ギッフナルト嬢).....	百廿五丁
雲(マエリー).....	百卅三丁

黄堇花(プライアント).....	百四十丁
勇者(ビュルゲル).....	百四十六丁
水鳥(フライアント).....	百五十四丁
夏の雨(マッケー).....	百五十八丁
思ひぞ出づる(フード).....	百六十二丁
夏の殘花(モリア).....	百六十五丁
冬(スミス).....	百六十八丁
晚鐘(モリア).....	百七十丁
わがよむ歌(ロングフェロー).....	百七十三丁
湖上美人(スコット).....	百七十七丁

歐米名家詩集中卷目次終



歐米名家詩集中卷

大和田建樹 輯譯

人生七期

シェークスピア

ウヰリアム、シェークスピア氏ハ千五百六十四年の四月英國
ワローウヰック、シャイアのストラットフォード、オン、アヴンに生る。幼
にして其地の學校に入り教育を受け。二十二歳の頃より龍
動に移り住めり。氏は劇場門前にて馬の番人を爲し其生計
を營みたる事もありき。後劇場に入りて役者の一人と爲る
然れども役者としては好き位置を有つ能はざりしが遂に

人生七期

おもしろや

院本作者として花々しき名譽を博し。擧げられて其座主と爲り。又エリザベス女皇陛下の知遇と得て。家屋土地を故郷に所有するに至れり。千六百十六年死す。年五十二。其作の有るもの。詩に「ヴェナス、エンド、アドニス」セ、レニア、オフ、ラクリース」あり。悲劇には「キング、リリア」「マクベス」「オセロ」「ロメオ、エンド、ジュリエット」「ハムレット」あり。戯劇には「エ、ミッドサムマー、ナイト、ドリーム」セ、マーシャント、オフ、ヴェニス」「アス、ユー、ライク、イット」「ゼ、メリー、ワイヴス、オフ、ウインズー」「オールス、ウエル、ザット、エンツ、ウエル」あり。史劇には「ジュリアス、シーザー」「コリオラナス」「リチャード二世」「リチャード三世」「ヘンリー八世」などありて。何れも世に珍重せらる。

浮世の舞臺踏みわたる

七幕ごとに出で入りて
 役者々々の人のかほ

乳母の胸につままれて
 かはる役目は何々ぞ

泣くより外にすべもふき
 序幕をばれば學校に

かよふ兒童のをさな時
 革囊を背に負ひつれて

朝日に顔を照らさせて
 いや〜ふがら今朝も又

蝸牛のあやみ進めゆく

さて罪もなき時すぎて

戀知りそむる若ざかり

思ふ少女の面かげを

詠せし歌や吟ずらん

ものかなしげに繰り返す

聲はひまなく響くふり

次には來る兵士の世

誓を立て、争ひて

命を餌と爲すまでも

求むるものは唯譽れ

さて法官の身とふれば

鶏トリの肉ニクもて肥ヒやされし

腹かきなで、賢こげに

證據あげつ、説き誇る

その嚴めしき眼こそ

八字の髯ヒゲともるごもに

役目よそほふ衣ふれ

資格あらはす印なれ

つひに開けし六幕目は

杖ツエを友なる老いの坂

枯木の柳影瘦せて

ちゝめる秋と爲りにけり

若きむかしの股引を

ふほ身に着けてよろこ

あぢむ足には世の中を

廣すぐるこやかこつらん

子供にかへる物言ひは

齒ぐきを洩れて口笛の

たえく響く如くにて

ふとき昨日の聲ならず

舞臺はこゝに一變し

再びもどる乳兒の役

物忘れする外にまた

齒なく目もなく味もふく

老より外にもものもふし

羽林姫

傳すでに上巻に出でたり。

キムベル

其一

『いでその舟よ舟人よ』

とくく渡せこの海を

黄金十枚とらすべし』

大音あげて忙がしく

呼ばゝる聲に見かへれば

いきせき來る人二人

其二

『この暗き夜にこの風に

この荒波にこの海を

渡り給ふは何人ぞ』

『さればよ我は島の長

又これふるは我情歸

ロードウリンの姫君よ

其三

『我等二人は家を出で

追手うけたる身なるぞや

見出だされふん其時は

我血にかけて戀人を

けがさん事の哀しさよ

危難此身に迫りたり

其四

『行方をこゝと知られふば

騎馬は急ち追ひつきて

その情郎を殺すべし

姫をば奪ひかへるべし

誰か残りてか花嫁の

心なぐさめまぬらせん』

其五

舟子は唯々、と身を起し

『いざ乗り給へ參るべし』

お供申すは黄金の

光のために候はず

たゞ、君の御爲めに

いとし姫御の御爲めに

其六

男子の一言たゞ勇氣

跡へは引かトいざおはせ

其七

はやていよ、吼え叫び

蹴立て荒れゆく海の上

怒れる空はくらがりて

いまだ言葉も終らぬに

かくす三人の顔のいろ

いづれか港いづこ海

其八

雲足はやく地に低れて

いよゝゝ 凄き夜の景色

折しも近づく人影は

追手か仇か父上か

砂を蹴立てゝはやこゝに

ひづめの響き鞭の音

其九

聲はりあげて叫ぶ姫

『ごくこの舟を出ださずや

よし荒波に捲かるとも

よし荒海に沈むとも

こわき父御のその前に

怒の顔を見んよりは』

其十

小舟は今や漕ぎ出でぬ

はやての陸を後あとにして

狂へる海を前にして

三人は浮きつ沈みつゝ

波は小舟を圍みたり

人の力もこれまでぞ

其十一

いのち限に漕ぎめぐる
怒濤の中のたゞ三人
駒のりよせて打ち望む
波のあふたの父ウリン
今は怒りも悲しみの
心どかはる顔のいろ

其十二

暗をひろぐる波の上
見とめし影は我姫か

其十三

見えつ隠れつ顯れつ
くるふ嵐の間あひだより
戀人いだく片手をば
伸ばして父やまねくらん

父は魂ひ身にそはず
波にはりあふ聲たてゝ
『かへれ我姫いざこゝに
さかまく波を横ぎりて
その情郎もゆるすべし
姫よいごしの我姫よ』

其十四

せんすべ絶えし海原に

叫ぶは波の聲ばかり

姫は姿をかくしたり

舟はかへらずふりにけり

涙と共にのこされて

たてるは父の影ひとり

戀人よ

ユーゴ

ヴクトル、ユーゴは千八百二年佛國のブサンソンに生れ。後佛國エコール、ローマンチックの長となれり。著作の有名なものは。詩に「オード、エ、パライド」「レ、ヅリアンタル」「フイユ、ドートンヌ」「レコンタン普拉シオン」あり。院本に「ル、ロア、サミューズ」「リュクレス、ボルジア」「クロンウエル」あり。小説に「ノートルダム、ア、パリー」「クロード、ギュー」「レ、ミゼラブル」ありて。當時佛國詩人の首座におかれつゝ、千八百八十五年に死せり。年八十三。

其一

我もし王の身なりせば
君が笑顔のむくいには

戀人よ

天下に臨む王冠も
力のかぎりさづくべし

四海に靡く人民も

海につらふる軍艦も

其二

我もし神の身なりせば

君がふさけのむくいには

あらゆる物を贈るべし

海をも陸をも虚空みそらをも

我にしたがふ天女をも

その天界の無窮をも

宿屋の下女

傳すでに上巻に出でたり。

サウシ

其一

あはれあの

狂女はさても何ものぞ

凄くすわりしまふどしは

あまる思ひを知らせたり

しづみがちふる顔色は

ふかき憂をつぐるふり

宿屋の下女

泣くにもまさる悲しみを
そのためいきに泄らすらん

其二

あはれみを

人にも乞はず救ひをも

求めぬ身には飢ゑこゝえ

心にかゝる様もなし

夜寒の風は瘦せほそる

胸にこたへて刺す如く

青ざめわたる頬の色

生きたる人とも思はれず

其三

いまこそあれ

このごろまでは此狂女

世を幸ひに送りしに

いとおもしろく暮しゝに

打ち見る人は誰も皆

メリーの如く愛らしき

少女はふしとほめつるに

外には見ずと評せしに

其四

宿屋の下女

この少女

ほゝゑみこぼす愛嬌の
言葉は常にめでられて

客のこゝろを引きぬたり
されど此子の性として

こわさといふ事知らざれば
暗き夜半にも古寺の

廊下にあそぶ時もあり

其五

この少女

心の内に待ちわぶる

結婚の日はさだまりぬ

その花婿をリチャードと

さく人々は取りえふき

このつれあひを嘲りて

あはれ不幸のメリーよと

皆口々にいひぬたり

其六

ころは秋

嵐はげしく吹きあれて

やゝ更けわたる夜の空

くらすはくらしいと寒し

宿屋の下女

宿屋の下女

二十五

火鉢のそばに旅人は

煙草ふきつゝさしむかひ

窓うちふらす風の音に

耳をすまして聞きぬたり

其七

『埋火を

かきおこしつゝ吼え狂ふ

嵐さく夜の心地ほど

楽しきものはよもあらト

さればよかゝる凄き夜に

人の勇氣をためさんは

かの古寺ぞよきところ

ゆくもの誰ぞかゝる夜に』

其八

『^{ひとげ}人氣ふき

寺のうしろに枯れたてる

梢のふるふ音聞けば

いかで魂ひ身にそはん

この風にては亡き人の

夢も墓よりあくがれん

目先に見ゆるおも影は

恨みを残す老僧か』

宿屋の下女

二十五

其九

「さなひひそ

メリーはいかに今宵しも
ゆくかゆかぬか賭かをせん

何とか思ふいざ君よ」

「それは無益なりメリーとて

今宵いかでか行かるべき

まぼろしにたつ幽霊を

見ても必ず氣絶せん」

其十

「あのメリー

君に汚名を立てられて
いかでか黙もだし居るべきぞ

勇氣の名をれおもしろや

かならず行かんごとく行きて

いてふの技を手をり來ば

われはメリーに新しき

帽子とらせんふにと君」

其十一

さるほどに

メリーいかでか恐るべき

いと心よくうけひきて

古寺さして出で行きぬ

天には流す墨の色

土には叫ぶ風の聲

今ぞ寒さに打ちふるふ

足ふみしめてたどり行く

其十二

行きふれし

細道ふほもわけ入れは

寺の軒端はものすごく

暗の中にぞ立ちぬたる

少女は門をくゞりたり

戸のある方に進みたり

されど恐るゝさまもふき

メリーは寺になゞ一人

其十三

落葉ふく

風より外に聲もふし

落ち散る瓦ふみこえて

しげる枯草ふみわけて

苔も幾世の寺の奥

廊下のもとに行きつきぬ

いてふの枝は淋しげに
ひどりやみぬたりけり

其十四

少女子は

急ぎ木陰に立ちよりて

手を打ちかくる折しもある

キヤツと一聲こはいかに

枝折りかけし手をさめて

耳をそなたに傾けぬ

初めてこわき恐るし

少女の身をばおほひたり

其十五

風あれて

稍いよ〜ふるひたり

少女は耳をすましたり

はや聲もふきもとの闇

嵐はふぎぬ少女子の

おそれはいつか収まらん

それかあらぬ彼方より

近づく人の足音は

其十六

宿屋の下女

おそろしき

息も絶ゆべき心地して

柱のかげに隠れたり

雲間もりくる月影に

こわくながら詠むれば

あらはれ出でし人二人

血もふまぐさき亡骸がらを

悲しやこゝにひきずりて

其十七

このありさま

ながめしメリー總身の

血は冷えわたり氣は失せぬ

嵐はまたも吹き出でぬ

男の帽子うばはれぬ

吹飛ばされてころころ

少女の前にまるび来ぬ

今や死せしかたふれしか

其十八

「待てしはし

帽子は風に取りられたり」

「かまはず死骸かたづけよ」

少女のあるを知らずして

はや悪者わるものは行き過ぎぬ
少女は帽子とりあげて
はしり出でたる寺の門
こわさは勇氣を鼓舞しつゝ

其十九

馳せつきぬ
息もたえど、まるび込み
あたり見廻す家のうち
あふ恐ろしやあなこわや
足はすくみて我身をも
載すべき力絶えはてぬ

半は死してわが口も
きけざるまでに疲れたり

其二十

こわかりし
話は今もまだ青き
唇もれて聞えたり
ふと目に浮ぶおもかげは
拾ひし帽子のうへふりき
そも何故ぞおそろしや
少女の眼まなこによまれたる
リチャードの名は其中に

其二十一

リチャードの

斷頭臺は今もふほ

鐵鎮の跡は今もなほ

残りて寺のかたはらに

あはれの少女メリーよ

かたり傳へて袖ぬらす

道ゆく人はいくたりぞ

枯れたるいてふの下かげに

春の頌

傳既に上巻に出でたり。

コーンウォール

其一

いばらの花に春風吹き

緑の野邊に小牛あそぶ

小川の水はかゝやきて

おのがまに〜走り歌ふ

是れ誰がために來し春ぞ

汝が身獨のためならず

わが身獨のためならず

春の頌

のどやかに吹き来る風

樂しげに草はむ牛

嬉しげに流るゝ水

春の光は野に山に

いたぬら世界のはてもなし

あはれ春よ美しの春よ

宇宙を喜ばし萬物を輝かす

春よ春ようつくしの春よ

其二

羊よ汝はいづくに行く

眠りよ汝はいづくに行く

羊は富める人の野に

眠りは貧しき人の床に

農夫は泣きて鋤を取り

王者はしのびて朝を聴く

是ぞ我世の常のみち

されどふほ来り救ふ

春は今こゝに立てり

美しき時を見せて

あはれそよふく朝風よ

花の香ふらぬ方もふし

あはれ春よ美しの春よ

宇宙喜ばし萬物を輝かす

春よ春ようつくしの春よ

四十

死美人

ブラウニング

エリザベス、パーレット、ブラウニング夫人は千八百九年龍動に生る。幼少の時より文才ありて夙に著作に志し。十七歳の時既に詩集の出版ありしが。三十七歳にして有名の詩人ロバート、ブラウニング氏の妻となりし以來、その名ましくあらはれたり。千八百七十四年死す。年六十五。

其一

やよ薔薇

しぼめる色は青ざめて

もとの姿はいづくぞや

箱の底ふる麥藁を

七年ち、とせのちに取り出でし

心地するこそあはれふれ

誰か其名をまた呼ばん

其二

いけがきに

汝きが身を吹きて花の香を

四方にくばりし春の風

死美人

四十一

今もしこゝに通ふとも

にほひをさそふよしもふく

たゞいたづらに吹き過ぎん

知らず顔にて吹き去らん

其三

汝が枝の

色香を添へて花の上に

燃え渡りたる日の光

今もしこゝに照らすとも

花をいろどるよしもなく

たゞいたづらに影さゝん

ひとりさびしく耀かん

其四

染められて

白き光もうす紅べにに

色どられたる花の露

今もしこゝにそゞごと

その美しき色うせて

もこの光にかへらまし

花を忘れし如くにて

其五

死美人

汝が上に

小さき羽ねをつぼめつゝ

暑さをさけし野邊の蝶

今もしこゝに休むとも

また見かへらん心なく

汝が身をよそに飛び去らん

知らず顔にて飛び行かん

其六

汝が露を

吸ひたくはへておのが巢に

琥珀集めし野邊の蜂

今もしこゝに飛び來とも

また喜びのさまもなく

汝が身をよそに飛び去らん

知らず顔にて飛び行かん

其七

かくばかり

世に忘れし汝が身をも

わが心こそ覺えたれ

汝が香をかぐもたゞ心

汝が美を見るもたゞ心

よしや形をかへしとて

造化の妙はわれぞ知る

其八

汝がうへに

愛をおくるはたゞ心

枯れしいばらよ死美人よ

舞蹈の場にかざりて

寒き笑顔を見せんより

枯れし後まで汝がため

碎く心に身を寄せよ

橋

傳既に上巻に出でたり。

ロングフェロー

其一

更け行く鐘をかぞへつゝ

橋のたもとにイめば

月はのぼりてほのぐらき

塔のうしろに影見せぬ

其二

静けき水の遠近に

橋

今ぞさやけき其影は
黄金の盃沈めつゝ
海原さして流れゆく

其三

霞み渡れる夏の夜の

かなたの岸にきらめくは

蘆火の影が誰が里ぞ

月より赤くもゆるふり

其四

ゆらめく焔に畫がゝれて

黒き軒端もうつりたり
水は是をも打ちのせて
海原とほく指して行く

其五

うづまく夜潮に碎かれて

月影ならぬ方もなし

こゝにかしこに水草の

影おもしろく浮びつゝ

其六

忽ちおこる大波は

橋

あの中にもみふざりぬ
心の中にみふざりぬ
あの柵にうちよせて
逆まく水の如くにて

其七

更け行く夜半の此橋に

獨り立ちつゝあの波と

あの大空をふがめんと

望みしことも幾たびぞ

其八

又ある時はひき潮の

流るゝ方につれられて

あの海原に出で見んと

願ひしことも幾たびぞ

其九

あはれわが世は憂もて

充たされたるをいかにせん

力にあまる重荷をば

休まぬ心におひながら

其十

重荷は肩を打ちすてゝ

橋

海に沈むと思ふまに
又悲しみの雲霧は

いで、心をおほひたり

其十一

されど夜更けて此橋に

イむときはみち潮の

かをりと共に新しき

思ひぞ胸を充たすなる

其十二

われより外に此橋を

渡りし人も多からん
憂の重荷おひつれて

千々のふげきを運びつゝ

其十三

かふたに渡りこゝに來る

老若男女とりどりに

休まぬ心の春もあり

望み絶えたる秋もあり

其十四

月日と共に行く水の

心に情をこけのたえ間なく
流るゝ限りいつまでも
身には憂ひの盡きもせず

其十五

月よ波間に散る影よ

天上にては愛の志るし

下界にくだれば定まらぬ

波にゆられて浮ぶ影

初旅

名はエドワード。未だ其傳を詳にせず。

モンロー

其一

淋しき海よ汝ちが胸に

起き伏す水の大きさを

何に比べて稱へまし

されど今までわが膝に

歌ひ笑ひしいと子を

奪ひ去りしは汝ちが業わざよ

其二

初旅

母の家には絶えざりし

春の光よ今いづこ

我子を汝は奪ひたり

はても知られぬ雲水の

空をへだてし此方には

ひとり涙を残りしつゝ

其三

神代のまゝの海原よ

波の色こそ淋しけれ

岸うつ音こそ遙かなれ

その岸よりも波よりも

遠きあふたにいとし子

奪ひ去られし悲しさよ

其四

讚美歌うたふ朝にも

祈りとなふる夕べにも

待てど我兒の聲はせで

伴ひふれし日曜の

寺にも見えぬいとし子よ

汝はいづくに失せつらん

其五

汝^{かれ}よ淋しき海原よ

我子奪ひてつれ也きし

汝^{かれ}よ波路よ滄海^{わつみ}よ

過ぎゆく月日と諸共に

忘るゝ世ふき我子の名

たゞ汝^{かれ}が胸にぞ記さるゝ

其六

朝夕さゝぐる詞にて

母が願ひの一筋は

はやくも知るしめさるべし

まもり給へや我神よ

御身^{おんみ}と共にあらせんと

我兒の上をどこしへに

其七

海よ淋しき海原よ

歌ひ笑ひしいとし子が

死^しの手に觸れて彼國に

さそひ行かれん其前に

汝^{かれ}が腕高くさゝげつゝ

おくり返せや我屋まで

其八

海よはてふき海原よ

天なる神の力には

其大ききも及ぶまじ

頼もし嬉し我神は

御名の光と諸共に

その身の上を照らすらん

彌生

ブライアント

ウヰリアム、カレン、ブライアント氏は千七百九十四年米國マサチューセツツのカムミングドンに生る。詩を以て名聲を博し。

千八百七十八年新約克のロング島にて死せり。年八十四。

其一

雲のいろ風のけしき

かはりがちなる空のさま

彌生は今こそ我前に

雲白き谷陰を

吹き捲く風のすさまじき

響きはなほも我耳に

其二

風おほき彌生の月

彌生

吹きあれがちの空なるを

誰かは愛で、親しまん

されど嵐よ立たば立て

彌生汝が身を好き時

譽むるはこゝに我一人

其三

北國の雪の上に

嬉しき日影もてこしは

汝より外に誰かある

春と名のりて花鳥の

色音さそふも汝ぞかし

たのしき春の魁よ

其四

嵐にて閉ぢられたる

雲間に笑顔みせたるは

のどけき未來の朝日影

大空青く吹き晴れて

風のどかなる五月をば

誰しるべせん汝が外に

其五

心地よき五月たゞば

まづは霜より解けそめて

皆諸聲に聲なつる

小川の水は樂しげに

歌ひて山を下らん

海に旅路や進むらん

其六

過ぎ去りし冬の形見

雪も氷も今はなほ

嵐の底に眠りたり

されど彌生よ汝が顔の

皺打ちよせし額には

深き望みを住ませたり

其七

地をおほふ花の荅

今より日々に添ひおかん

明日より四方に廣がらん

うつくしき花時も

のどかに晴るゝ青空も

汝こそ我にもちきたれ

六十五

静けき夜半

傳すでに上巻に出でたり。

モ一ア

其一

更かうだ闌け人しづまりて

夢まだ襲はぬ閨の内

過ぎし昔のおもかけを

運ぶ記憶のたのしさよ

笑ひ悲しみもろともに

ひやくは何時いつの愛の聲

やうくくにふわりゆく

目はすでに閉ぢられぬ

又また樂しみの影もなし

かくて更闌け人しづまりて

夢まだ襲はぬ閨の内

記憶は又もはこぶふり

悲しき昔のおもかけを

其二

事去り時うつりて

舊友次第に散亂し

冬の本の葉ともろともに

おのが廻りに朽ちほてし

むかしをこゝに數ふれば

静けき夜半

恰も夜會の時すぎて
人さんど火は消えて

興さめし其中を

ひとりたどるに似たりけり

かくて更闌け人しづまりて

夢まだ襲はぬ閨の内

記憶は又もはこぶふり

悲しき昔のおもかげを

舟子

ロージャース

キミエム、ロージャース氏は千七百六十三年龍動に生る。記
憶の快樂「閻龍」人生「伊太利」等の作者として著はれたる
詩人なり。千八百五十五年に死す。年九十二の高齡に達した
り。

其一

なごりをし故郷は

烟のうちに影きえて

塔さへ見えずなりにけり

いま一目ふがめんど

舟子がのぼる帆柱に

あつまる思ひ如何ならん

舟子

其二

住みなれし我故郷

心に消えつあらはれつ

その面影は絶えまふく

澄みのぼる月影に

打たれて又も湧き出でぬ

嗚呼いつか消え失せん

其三

吹き荒るゝ波風の

中に立ちても忘れぬ

今や身は是までと

故郷の情よ妻や子よ

よわる心を引きたてゝ

望み持たすも此こゝろ

其四

水や空空や水

はてふき波の遠方に

浮ぶは別れし人の影

明けそむる朝にも

しぐるゝ雲の夕べにも

暗路さびしき夜中にも

其五

ゆく舟の跡おひて

離れぬものは故郷の

影か情か戀人の

吼え狂ふ荒波に

消されし心ふぐさめて

さゝやく望みの聲すなり

其六

なつかしき人の名は

跡なき海にきざまれて

其七

あの舟は今ぞはや

帆を浦風に孕ませて

見よや湊に入りきたる

見なれたる岩の上に

わが戀人は立ちぬたり

よろこぶ聲は響きたり

うつくしき水鳥の

友よびかはす波路にも

日影へだてし波間にも

目先に見えぬひまもふし

其八

手を振りて招くふり

碇は水に投げられぬ

帆綱はたぐりおろされぬ

沫波を飛びこえて

舟子は陸にあがりたり

今こそ愛のその胸に

母待つ子

ウヰーヅウヰース

母待つ子

可愛の子供よ

おん身は愛の母上に

其一

ウヰリアム、ウヰーヅウヰース氏は千七百七十年英國カムバール
ランドのコッカーマウスに生る。幼にしてランカシャーのホ
ークシード、グラムマー、スクールの教育を受け。後ケムブリッ
ヂなるセント、ジョン氏の大學に入りて學べり。七十三歳の時
サウシー氏の後を繼ぎて欽定詩宗に擧げられしは人以て
榮とせり。千八百五十年四月死す。年八十。有名の作には「ゼ、エ
キスカージョン」「ピーター、ベル」「ヤーロー、レヴヰシテッド」「オー
ド、ツ、デューナー」「ルーシー、グレー」等あり。

七十六
わかれてこゝに一箇月

あすは歸りておはすべし

あすはよき日ぞ吉日ぞ

其二

めでたき音づれ

さくうれしきは先づ兄の

顔の色にぞのぼりける

立ちて笑ひて叫びたり

『母上はやく我いへに』

其三

大聲あげつゝ

兄はしきりに呼びぬたり

かひなき望みを望みつゝ

『けふはこらへよ聲かぎり

呼べど母には聞ゆまど』

其四

はるかに隔てし

旅の長路の是非ふさを

我は子供に話したり

張りし心や弛みけん

なにおとふしく聞きぬたり

母待の子

七十七

其五
傍^{たは}なる妹^{いもうと}は

旅の長路の是非ふきも

明日^{あした}ふらではの理りも

何とも思ひ知らずして

たゞ嬉しさに満たされぬ

其六

自然の喜び

堪へぬ心をあらはして

猫と小鳥ともろともに

たゞ躍りつゝ狂ひつゝ

母のかへりを觸れ廻る

其七

聲はりあげつゝ

兄は妹のよろこびに

應じて更に我膝の

乳^ち兒^こだきしめて嬉しきの

同じこゝろや傳ふらん

其八

かくまで楽しき

母待の子

けふの夕べを花園に
いざ送らんと出でゆけば
入日の影も腰掛に
かゝりて我を待ち居たり

其九

うれしくたのしく
母の留守にて有りしこと
みふくりかへし話したり
柳の陰に散歩して
池の鵜鳥を見しことや

其十

うれしくたのしく
過ぎつる冬の有様や
家はにち巢ぐひし鳥のここと
巢はだちて鳴きし雛のここと
蓄は薇ちの青葉の出し事や

其十一

うれしくたのしく
此ものがたりくりかへし
明日は母にぞかなるらん
子供の友は数そひぬ

母待つ子

驢馬に鶯鳥に小羊に

其十二

いでく歸らん

夕べの星に送られて

寐床はおん身を待ち居らん

されど二人は何となく

名残をしげに立ちぬたり

其十三

さはいへ忽ち

かはる心のたのしみは

我もあとより追ひかけて

のぼる階子に響きたり

いぞ競走の加入せん

其十四

四五分すぎたり

見よや變化のすみやかさ

はやも二人は寐入りたり

動きし手足は静まりて

輝き渡りし目は閉ぢて

獨

傳すでに上巻に出でたり。

パイロシ

其一

苔むす岩に座を占めて

下ゆく水をながめつゝ

心やしなふ其折も

又は人なくあるどなき

森の下草ふみわけて

静けさ探る其折も

野飼の鹿につれられて

高嶺にのぼり谷におり

瀧のおとさく其折も

なほ獨には非ずかし

言葉かはして打ちかなる

身然の友こそいつも身に

其二

されど競争衝突の

さわざ絶えせぬ人界に

身は置きながら幸福の

光を共に受けがたき

貧苦あまたの世の中に

獨

遊ぶ我こそたゞひとり
榮花の春も追ひ來ねば

きのふの友は今日の敵

死すこと吊らふ人もふし

世に捨てられて忘れて

のこる我身は唯こゝに

是こそまことの獨ふれ

母の肖像贈られし時

クーパー

傳既に上巻に出でたり。

あはれ言葉の響きしは

このくちびるよ此口よ

その聲つひに絶えはて

はや幾年にふりぬらん

をさなきむかし我上に

情をかけてこぼとなる

笑ひは今もあらはれて

この唇にのぼるふり

『泣くな恐るな我子よ』

いふ聲ひやく心地して

なほなつかしきまふざしに

母の愛こそ宿るふれ

月日隔てし今日こゝに
同し姿を運び来て
我を常盤に慰むる
形見は是ぞなつかしや

深き慈愛の面影よ

今朝まで思ひかけざりし

よき客人まれびとはおはしたり

今は世になき母ふらで

満ちたる愛を歌ひつゝ

我を遊ばすものぞふき

いでや此世におはしたる

母の像を贈られし時

その教訓を守りふん
時の如くに仕へなん

よし物言はぬ面影は
心の限り従はん

をさふき夢をそのまゝに
涙の種とあるとて

今も見さする嬉しさよ

これが此世の別れぞと

初めて知りし其時に

涙流して泣きたるを

君もあはれと見られしか

慣れぬ浮世の初旅に

獨り悲しく残さるゝ

我身の上に迷ひ來し

その魂ひやいかふらん

目にこそ見えぬ其時に

君も涙をうかめしか

問へば答ふる如くにて

こぼす笑顔よ母上よ

思へば野邊の送りの日

御寺の鐘をぞわが聞きし

柩をそこに運び行く

その行列をぞ我は見し

その時顔をさし入れて

窓の内にて獨り泣く

涙も聲も諸共に

長き別れを知らせたり

夢か現かおぼつかふ

君はふたゝび歸り來す

今はさらばの言の葉も

聞えぬ國に到りけり

今は彼岸にめぐり逢ふ

外に望みはまたあらど

わが唇もわが舌も

別れを告げんよしぞふき

母の像を贈られし時

沈みがちふる我こゝろ
 ふぐさめ顔の乳母等に
 いたくな泣きそ母上は
 今に歸りておはさんと
 欺かれつゝいたづらに
 明日はくゝと待ちかねし
 事も空しくなりにけり
 頼みかひふく破れけり
 明日去り明日は来りつゝ
 悲しき日々は過ぎ行きぬ
 歎きの種も盡きはてゝ
 運に任せん外あらど

無情に我を置き去りし
 月日やうく程經れば
 袂は乾く時あれど
 忘るゝ暇はふかりけり
 * * * * *
 時の流れは絶えずして
 望みし事も叶ひたり
 君が喜び今こゝに
 再び破る罪ふくて
 幼き昔に立ちかへる
 我喜びは得られたり
 君を我より隔てたる

母の像を贈られし時

其年月の仕業にも

奪ひ得難き想像の

翼は長く自由にて

我を再び慰むる

力はこゝに何時までも

面影のこす寫畫の

恵みはこゝに何時までも

緑村

傳既に上巻に出でたり。

ジェーン、テラー

其一

小家もて圍かこ繞こまれし

緑の村に遊ぶ子等

輪をまはしま毬まを投なげ

少ち男おとこ小こ女をんな等らうち群むれて

其二

面白く嬉うれしげに

手を引き合ひて列らなてゝ

進み行く兵隊の

まねして遊ぶ餘念なき

緑村

其三

鞠は今蹴られつゝ

虚空に躍り壁に舞ひ

また上にまた下に

あれ見よはづむ其様を

其四

走り行く輪のあとに

追ひかけまはす子等の聲

喜びは溢れつゝ

顔の色にも見ゆるなり

其五

うまさ肉肥えし土地

富貴の家の饗應も

此子等のたのしみを

その半だに満たすまじ

其六

奢をもうらやまど

譽れの花も願ふまじ

真なる樂しみは

縁の村に住むものを

縁村

知りそめし嘆

ヒーマンス

フエリシア、ヒーマンス氏は千七百九十三年英國のリップ
ールに生る商人の娘なり。十五歳の時より女性詩人として
世に名を知られしが。後嫁してキャプティン、ヒーマンスの妻
と爲り。ますます名作を出だす事絶えざりしに。惜むべし千
八百三十五年は四十二歳の妙齡を以て没せり。

其一

『呼びてたべのう兄上を』

花よ胡蝶よ春風よ
我は獨りて遊ばれず

あゝ兄上はいづ方に

其二

霞む日影の遠近に
遊ぶ胡蝶の三つ五つ
あれ追ひてとはねなるまど
呼びてたべのう兄上を

其三

『共に種蒔き植ゑつけし』

知りそめし嘆

花は大かた散りはて、
葡萄は房ごふりにけり
呼びてなべのう兄上を』

其四

『呼べども彼は得聞くまど
招けど彼は歸るまど
再びこゝに逢ひ難き
笑顔は過ぎし春のごと

其五

『咲けばこく散る蕃薇こそ

汝は獨りで遊ぶべし
彼がみとかき世の中よ
天ふる兄をいかにせん

其六

『世に花鳥を見捨てつゝ
呼べども遂に歸らぬか
長く久しき夏の日を
いかに暮さん兄上よ

其七

『谷の小川を打ちつれて

知りそめし嘆

渡りし春は夢ふれや
あゝあの時に今少し
愛しておかばよかりしに』

貧女の歎き

ウァーヅウァース

傳既に出づ。

其一

日は寒くして夜は長し
風は北よりおとづれて

凄き歌をぞ口ずさむ

おん身ふらでは我心

また慰むるものもなし

かはゆきものよ我乳兒よ

其二

猫は巨燧に寐入りたり

枕に近く鳴く虫の

歌も静になりけり

飢ゑし鼠の外にまた

わが屋騒がすものもふし

などておん身は休まぬぞ

其三

雨にな、かれ破られし

窓洩る月ぞあの影は

いざ驚かてとく眠れ

かはゆきものよ我乳兒よ

夜の明くるまで我胸に

心やすめて起くるなよ

デーの砂道

キングスレー

傳既に上巻に出でたり。

其一

『やよメリーいざ行きて

羊を家につれ歸れ

羊を家に呼び來れ

デーの砂道踏み越えて』

西風強く吹き荒れて

波うち散らす夕暮に

道行く影はメリー一人

其二

デーの砂道

波はたゞ廣がりて

砂より上に又上に

砂のまはりに又まはりに

見渡す限りはてもなし

霧さへ四方に塞がりて

月をも陸をも隠しゆく

出で行きし人遂に歸らず

其三

そは草かそは魚か

波に浮ぶは人の毛か

さりや溺れし少女子の

年月こゝに住み慣れし

髪こそ網にかゝりたれ

魚も見知らぬ美しき

黄金こがねの髪はあはれこゝに

其四

舟子等は乗りだして

逆巻く波のあなたより

少女のからをぞ引き上げし

この汀ふる墓場まで

されど少女の聲はふほ

今も舟子に聞ゆなり

『こちこよ羊いざや家に』

小羊

傳既に前に出づ。

ウーツウー

其一

草葉に露の見えそめて
星の光も地におちぬ
『飲めよ〜』といふ聲の
聞ゆる方を詠むれば

雪をあざむく小羊は

少女こゝめのそばに立ちぬたり

其二

そのあたりには小羊の

外に家畜の影もなし

かたへの石に繋がる

身はおどろしくうれしげに

片膝つきて少女が

すゝめし夕飯ゆふけ受けぬたり

其三

小羊

尾を打ち振るはふるこびの

堪へぬ心や示すらん

「飲めよ〜」といふ聲の

優しき調べ聞くごとに

いつしか我もさそはれて

少女心にうつるまで

其四

花にもまさる少女子と

雪より白き小羊と

よき一對の友どちよ

あきたる桶を手に提げて

歸りかけたる人はまた

やがて歩みを止めたり

其五

少女はこふた振りむきて

羊のかたに見おこしぬ

彼こそ知らぬ我目には

笑顔のこらす見られたり

響くが如き歌ごゑは

そのくちびるか我耳か

其六

小羊

「何をか左程くるしみて

そふたに綱を引きゆくぞ

緑肥えたる若草は

臥床をいつも柔かに

ひろげて汝を待つものを

休めよ羊わが友よ

其七

「毛は美しく足つよき

身にまた何を求むらん

花さへ添へて若草は

汝が住む庭を富ましたり

麥の春風こゝちよく

其あたりにご吹きめぐる

其八

「日の影暑くなりゆかば

綱ひきのべて眠るべし

すゝしきそこの松陰に

暫時その身を横たへて

雨も嵐も恐るふよ

汝が閨までは襲ひ來ト

其九

小羊

「忘れもすまじ小羊よ

遠とちの山邊に我父の

汝なれを見そめし日の事を

拾とひあげたる日の事を

その飼主も持たざりし

汝なれには母もなかりしを

其十

「あはれと思ひ我父は

草の中より取りあげて

はるく抱き歸りたり

あゝ汝なれがための吉日よ

その故郷ふるさとの奥山に

あかりし乳母うばをも汝なれは得つ

其十一

「日ごとに三たび此桶に

汲み入れてやる真清水の

深き心は汝なれ知らん

又朝夕になやみなく

しぼりて飲ます牛乳の

厚あつき情なさけは汝なれ知らん

其十二

小羊

「汝が足強く生ひたゞば

車挽かせて諸共に

春の野の邊に遊ばまし

嵐寒けく吹く夜半は

圍爐裡のそばに暖かき

臥床さだめて寐させなん

其十三

「まだ眠らずやまだ寐すや

あはれふびんの小羊よ

常に汝が身の上思ふ

母の心はいかほごぞ

いざや疲れを休めつゝ

見られぬ影を夢に見よ

其十四

「今は緑に美しく

見ゆる向ひの山の端も

嵐と闇を運び來ん

今は樂しく行く水も

怒らば波を逆卷きて

獅子の如くに狂はまし

其十五

「されど夜晝よるひるおそれなく

我を力に暮すべし

など我後あとを追ひ來るぞ

など綱長く引き來るぞ

眠れ羊よ夜明けふば

再びこゝに見舞はまし』

其十六

すゝますながら別れ行く

垣根づたひの道すがら

きこえし歌を幾度も

くりかへし又くりかへす

我が少女の小羊か

妙ふる聲はふほ耳に

其十七

おのが心は少女子に

通ひて聲に出でつらん

少女よ我よ小羊よ

調べは長く我胸に

いつしか我もさそはれて

少女心にうつるまで

カサゼアンカ(ナイル河の戦に父と共に討死せし勇童の名なり。時に年十三) ヒーマンス
傳既に出づ。

其一

皆逃げ失せて人もあき

甲板になつ子は誰ぞ

死骸の山を取り圍む

火花の中になかひひとり

其二

形こそ子供振舞は

その焰より火花より
あつばれ勇士よ大將よ

顔のいろこそ照りわたれ

其三

火の手いよ〜攻め寄せつ

されど一歩も退かト

もはや此世に口もたぬ

父の言葉を聞くまでは

其四

『我事既に終れるか』

父よ』と呼べど聲もふし
はや戦死せし我父は
煙の中に伏し居たり

其五

『もはやこゝをば去るべきか
父よ』と問へど音もせず
砲聲響き海答ふ
燄は舟にうつりたり

其六

火ははや眉を掃ひたり

火ははや髪を掠めたり
されど子供は退かで
見るく死地に残されぬ

其七

『ふほ去るまどきか我父よ』
最期の聲は響きたり
今や燄はひろがりて
帆にも旗にも燃えつきぬ

其八

見るく旗は奪はれて

旗かあらぬか美しく
ひらめく影は子の上に

舟一面の火となりぬ

忽ち響く雷の聲

其九

舟は裂けたり子はいづこ

舟材を海に吹き散らす

風に行方は問ひて知れ

其十

あはれ帆旗よ帆柱よ

なほそれよりも勝れしは
その職務をば果したり

忠勇無雙の子の戦死

故郷の別れ

ギッファルト

ギッファルト嬢は未だ其傳を詳にせず。

其一

わがつまよ

おん身が我に嫁せし頃

故郷の別れ

百二十六
樂しき春のあけぼのに

影をふらべて腰掛けし

岡はそのまゝ猶こゝに

夢は緑に波うちて

雲雀の歌も響きしよ

おん身が眉は美しく

その唇はくれふぬに

其二

わがつまよ

岡は昔の春の色

空は昔の日の光

雲雀の歌もかはらぬを
麥の緑もかはらぬを
共に遊びし其人の
見えぬのみこそ悲しけれ
問へど答もふき人に
耳かたむくるはかふさよ

其三

わがつまよ

岡の麓に立つ寺は

わが婚禮をせしところ

塔は見えたりふほあれに

故郷の別れ

されど墓所はかもなほそこに
わが足音は静かふる

おん身の夢や破りふん

その幼兒わかごと諸共に

眠るあたりを過ぎ行かば

其四

わがつまよ

神にすがりてなほ頼む

真まことの愛の友ならで

思へ貧しき此身をば

人も見捨つる淋しさを

あはれ自慢と幸福を

我に與へしその人の

行きたる後はおのが身に

又殘さるゝものもふし

其五

わがつまよ

若き齡の春の日に

見捨てられたる夕まぐれ

なほも望みをおのが身に

繋ぎし人は誰なるぞ

愛の言葉を懸くれども

故郷の別れ

今は答へもなき人の
その親愛のくちびるは

こゝにも動く心地して

其六

わがつまよ

身をとりかこむ苦しみの

さ中に立ちて我爲めに

作りし笑顔いくたびぞ

解けぬ心の悲しみも

忍びかくして楽しげに

われ慰めしいくたびぞ

餘る心の喜びを

言はんとすれば今はふし

其七

わがつまよ

長の別れとなりたれど

いつかおん身を忘るべき

我行く波のあふたには

楽しき事のありと聞く

日影も常に美しく

我身の上に照ると聞く

されど昔の故郷を

故郷の別れ

いつか忘るゝ時あらん

其八

わがつまよ

我知らぬ國にゆくことも

こゝろは長く戀人の

臥床^{ふしど}さだめし故郷^{ふるさと}に

波を渡りて旅すべし

わが花嫁さうちつれて

影をならべし岡邊には

吹く春風にうちそよぐ

夢もむかしの際にて

雲

傳既に上巻に出でたり。

シユリ

其一

われは海より川瀬より

雨のしづくを運び来て

しほめる花を救ふふり

われは日影を遮りて

森の木の子の葉の打ち休む

雲

晝寐の夢をまもるなり

ゆられて母のふところ

に休む蒼を呼び醒ます

露をもわれは贈りなり

霰と雨を振りまきて

野を白くしつ青くしつ

雷かみ聞く毎にうち笑ふ

其二

嵐の腕に身をよせて

眠る一夜の枕こそ

あの雪白き松が枝よ

雷かみを遙かの谷底に

聞き捨て、行く天つ空

道しるべする稻妻は

野越え山越え海越えて

岡に流れに湖に

おのが前にぞ走りゆく

空の笑顔のあらはれて

おのがうしろに立つ時は

雨と姿を變じたり

其三

もゆる鎖をひろげつゝ

雲

昇る朝日は樂しげに

わがそびらにぞ立ち出でし

夜明を告ぐる明星は

光やうくうすらぎて

たゞ明け渡る山の上

地震に壞ゑし岩角に

黄金の翼羽たゞきて

おりぬる鷲と身をふしつ

沈む夕日の波間より

更になゞめる翼もて

静けき空に歸り行く

其四

月の少女は夜嵐に

吹き散らされし綿床を

静かに今ぞ歩み行く

天女ならでは誰聞かぬ

その足踏の響きにて

わが張りつめし白布の

帷の屋根は破れたり

そこよりのぞく星を見て

我は今宵も笑ふのみ

今ぞ下界の海川は

月と星との光もて

わがほころびを埋めたり

其五

月日の影を明らかに

空に見するは我しわざ

なほ曇らすも我ちから

颯^{つち}起して行く時は

火山も見えずかき暮れて

星も姿を隠すべし

峙つ山を柱にて

空より空にかけ渡す

橋よ嵐の海原に

雨にしめりて打ち笑ふ

地球を下に詠めつゝ

虹をぞ我は織り出だす

其六

水と土とは我を生み

みそらは我を育てたり

姿は常にかはれども

遂に死すべき時もあし

雨やみ日影あらはれて

縁にかへる天の原

残す形見を名残にて

雲

我は谷にぞ歸り行く

我は姿を隠し行く

されど寐床を又出で

もこの如くに打ち遊ぶ

空こそおのが自由ふれ

黄堇花

プライアント

傳既に前に出づ。

其一

梅の荅はふくれたり

初うぐひすは聞えたり

去年の古葉の葉がくれに

見ゆるは汝よ首たれて

其二

まだ冬がれの木の下に

汝に逢ふこそ嬉しけれ

まだいとけなき春風に

にほひつけしは唯汝よ

其三

來りし春は手をのべて

汝をぞ野邊に植ゑつけし

雪まだ白き岸影に

花待ち得たる樂しきよ

其四

その唇を瑠璃色に

色どり渡す日のひかり

露打ち吸はせ育てつゝ

おくる慈愛は汝が爲めに

其五

あはれ姿のかよわさよ

下むきがちのその顔よ

驕れる花にならびては

いつも寵をぞ奪はるゝ

其六

花なき頃は汝がそばに

引かれて我もすわりたり

されど盛りの春日には

汝を見ださん暇もふと

其七

黄堇花

富貴にふれば古への

貧しき友を忘るゝは

あゝ世の中の常の様

されど學ばば我のみは

其八

よしや千草の咲きにほふ

春の日影にあふこども

花ふき園を照したる

汝は忘れどいつまでも

勇者

ビュルゲル

ゴットフリード、アウグスト、ビュルゲル氏は千七百四十七年獨
乙國モルメルシエンデに生れ、千七百九十四年六月八日ギエツ
チンゲンに於て死す。哲學博士たりし有名の詩人なり。

其一

渦巻く雲を蹴散して

怒り荒れゆく風の聲

飢ゑたる虎か狼か

氷の上に波たてゝ

廣野を拂ひ森を掃く

勇者

其二

高嶺の雲を打ちのせて

下す雪崩ゆたかの瀧のこゑ

海は谷間を沈めたり

川水岸におしよせて

氷の山をながしゆく

其三

石をかきわけて作りたる

壁と柱の橋のうへ

中央ちゅうからに立つハ誰が家ぞ

主人あるじよ妻子つまこもろともに

あぶなし早く逃げいでよ

其四

震動のこゑ風のおと

家は水にて捲かれたり

主人あるじは屋根に這ひ出でぬ

『來り救へや助けよや

天よ慈愛の我父よ』

其五

かふたの岸にこの岸に

勇
者

漲る水はこゑたてゝ

柱を碎き壁を裂く

風か主人あるじの呼ぶ聲か

波か妻子つまこの泣く聲か

其六

とゞろく聲は猶高く

見る間に橋の一壁は

はや飛び散りて跡もなし

慈愛の天よ滅亡は

家の四面を取りまきぬ

其七

此ありさまを見る人は

手を振りまはし叫びたり

ふほも助けを呼ぶ聲されど應ずるものもふし

風のまに響きたり

其八

かゝる處に一紳士

駒のりよせて呼ばりぬ

救ひかへらん人あらば
『波を冒してあの家族

勇者

衰美の金を取らせんと

其九

水はいよ／＼はびこりて

風はます／＼狂ひたり

臆して進むものもふし

起てや勇士よ躊躇せば

柱も家も飛び失せん

其十

聲ふりしほり衆を鼓し

黄金の囊さしあげて

せんかた絶えし彼方には

紳士は人を募れども

妻子の叫び猶ひかく

其十一

成否は知らず此方より

歩みいでなる一農夫

我あたらんと諾ふたり

身に粗服こそ纏ひたれ

威風どにかにあらはして

其十二

神に祈念を凝らしつゝ

いそぎ小舟に飛び乗りて

波のあふたに漕ぎよせぬ

されど四人をのするには

堪へぬ小舟のかよわさよ

其十三

怒れる波は三度まで

狂へる風は三度まで

せまりて舟を呑まんごす

今ぞ四人は此岸に

破裂の聲は彼家に

勇者

其十四

「あつばれ勇者約束の

褒美は是ぞ來り取れ」

紳士が詞のけだかさよ

されどそれより彌いん高き

農夫のこゝろは懐に

其十五

「神に賣りたる身ならねば

褒美はすべてあはれふる

主人あるじに取らせ給へかし」

此一言をあとしして

行くかた知らずふりにけり

水鳥

傳既に出づ。

ブライアント

其一

入日のふごり美しく

いばら色ふる夕空を

いづくさしてか汝は行く

翼を露にしめらして

其二

墨筆とりて紅べにの上に

ゑがきさしたる汝が影は

ねらひ定めし矢も玉も

こゝかぬばかりふりにけり

其三

何くふるらん行く方は

波うきしづむ海原か

小川の岸かみづうみの

水鳥

汀のあしの葉がくれか

其四

道ふき海に汝が道を

はてふき空に汝が道を

迷はぬやうに教へたる

奇しき力は誰が手より

其五

雲より雲を扇ぎつゝ

終日空にはたらきし

翼はたゆむ事もなく

夜はくれども猶あれに

其六

されど間もふく夏の來て

身を休むべき住家には

蘆の下葉も汝がために

その隠家をおほはまし

其七

飛びゆく影は吞まれつゝ

空のあなたに消え失せぬ

されど心に残したる

水鳥

汝が教へこそ永久とこしへに

百五十八

其八

はてなき空の奥までも

たゞ一筋に導きて

汝おれをつれゆく力こそ

我ふむ道のしるべふれ

夏の雨

マッケー

チャーレス・マッケー氏は英國パースに生る。千八百四十一年よ

り千八百四十七年に至る間グラスゴー、アーガスを出版し
千八百六十年に始めて龍動レヴューと發行せり。千八百六十
二年米國新約克に行きて六十五年まで住せり。有名の作は
「エキストラ、オード」「ポピュラー、デジュージョンズ」「ロスト、ビュ
テース、オフ、ゼ、イングリッシュ、ラングエージ」「スルー、ゼ、ロンダ、デ
」等其他にも數多し。

其一

かすかに響く山水の

歌もしばしはとだえして

雲よりわかち送られし

恵みの露は地ちの上に

夏の雨

百五十九

吹けや〜西の風

おちくる雨のしづけさよ

花にはあがく美の姿

園にはたつる樂の聲

色に出でたる喜びの

心は畑をみたしたり

静けき雨のけしきかな

其二

雨は降り來ぬみそらより

富の雫はこぼれ來ぬ

庭の木の葉に音たてゝ

雲は野邊を友として

軒端に玉をまろばせて

その足踏を聞くごとに

おくりし雨のしづけさよ

しほめる麥はおさかへり

緑いやます草のいろ

森にも起る樂の聲

流れは今ぞ打ちつれて

雨の感謝やさゝぐらん

讚美の歌は山に満つ

思ひぞ出づる

傳既に上卷に出でたり。

フー
ド

其一

思ひぞ出づる今も猶

わが生れたる故郷を

親しき窓にさしふれし

朝日はいつも待遠に

入日ハ名残をしまれて

暮らし、時もありつるを

今ハ夜の間に誘はれん

其二

思ひぞ出づる今もなほ

昔の宿のおもかけを

薔薇に並に白百合に

色香あまたの花園を

わが駒馬の巢をかけし

かなたの森も忘れぬを

わが兄弟の誕生に

植ゑし木陰も忘れぬを

思ひぞ出づる

其三

思ひぞ出づる今も猶
 ぶらんこ遊びせし庭を
 空に羽根きるつばくらの
 身にもなりたる心地して
 あはれ昔はわが心
 翼に乗りて遊びしを
 今はすゞしき池水も
 憂ひ洗はんよしもふし

其四

思ひぞ出づる今もふほ

梢は天にこゝくかど
 虚空を凌ぐ山毛櫨の木を

幼心のやめさめて
 思ひし事のおろかさよ

されど近しと頼みたる
 天路は遠くなりにはけり
 その楽しみは又あらず

夏の残花

傳は上巻に出でたり。

モ一ア

其一

春におくれてたゞひとり
 咲ける薔薇さずひのあはれさよ
 親しき友は散りはてゝ
 誰と昔をかたるべき
 枝をかはして助けあふ
 荅も見えず花もなし

其二

枝さびしげに残さるゝ
 汝なれをば長く見すつまど

眠れよいざや諸共に
 散りたる花の跡おひて
 今や汝なれ等が死の床を
 おほふ落葉ハ我手より

其三

玉と碎けて友だちの
 愛も其身も消えん日は
 我のみありて何かせん
 ひとりに残りて何かせん
 あはれ淋しき世の中に
 春より後の葉がくれに

冬

スミス

ジョー・ムス、スミス氏は千七百七十五年龍動に生れ、千八百三十九年死せし詩人なり。年六十四。

其一

水車氷にとぢて

常磐木は寺をおほへり

宿り木は冬なきかげを

軒端より垂れて時めく

水桶にさがるは氷柱

垣の上にとまる鳥も 池の上をすべるは子供

枯草に聲うちたてゝ

さびしげに庭をぞのぞく

肌とほすあした夕べの

風の寒けさ

其二

其三

鴨打にゆくも此時

落葉かき來るも此時

鼻息は煙と見えて

冬

霜朝にたちぞのぼれる
山かけに牛かふ賤は

銅桶の氷を碎き

おしふべて老いたる若き

咳せきをせぬ人もふし

照ることを忘れし日影

ふほ赤く空に見えつゝ

風のさむけさ

晩鐘

モ一フ

傳は上巻に出でたり。

其一

あの夕暮の鐘の音よ

いつも楽しき鐘の音よ

聞けば心に響きくる

昔の夢はいまこゝに

わが少年の春風は

故郷こきやうの影をさそひ来て

其二

たゞ喜びの其うちに

鐘

送りし春は過ぎ去りぬ

親しき友の大かたは

墓のしづくど消えうせて

此夕暮の鐘の音も

もはや聞くべき由もなし

其三

我亡きのちの歌人が

こゝを過ぎ行く夕べにも

同じ音色にひびきつゝ

昔の歌やつゞくらん

あはれ樂しき鐘の音よ

いつも嬉しき鐘の音よ

わがよむ歌

ロングフェロー

傳は上巻に出でたり。

其一

いづくよりとも知られぬは

春くる鳥の歌聲か

縁しづめる大空に

出でたる星の夕影か

わがよむ歌

其二

雲よりおつる村雨か

谷より出でし川水か

静けき空にひゞきつゝ

にはかに聲の聞ゆるは

其三

蔓に梢にあらはれて

見ゆる葡萄か桃の實か

松にかよひて吹く風か

海にさしくる朝潮か

其四

よする水泡か砂濱に

うかぶ帆かけか海原に

少女の顔になつかしく

のぼるゑまひの其影か

五

歌人の胸に浮びくる

歌の思想は唯それよ

その源をたづぬれば

知る人絶えて空遠し

其六

おのが心に浮びたり
されど其歌わがならず
おのが歌もて得られたり
されど其名もわがならず

其七

晝わが筆をすゝむるも
よる我胸をふやますも
たゞ虚空みそらより『よめ』といふ
天女の聲をしるべにて

湖上美人(抄譯)

傳は上卷に出でたり。

スコット

其一

夕べの影は静にて
墨畫にゑがく森の色
ねぐら離れて梟の
月に嘯く時も來ぬ
狐の聲はものすごく

湖上美人

穴のはごりに響きたり
 たき火の影は行く人を
 導くばかりのこれども
 深く眼をくばりたる
 敵に知らるゝ程ふらず
 耳をかたむけ歩を氣つけ
 こゝに來かゝる旅人は
 葛^{かづら}ちからに岩をよぢ
 森の下道たどりゆく
 時節は正に夏^げ至^しなれど
 夜^{よる}なほさむき奥山の
 風身にしみてそよ〜と

其二

空にぞ松の聲はする
 山下露に濕りつゝ
 凍えし足を踏みしめて
 飢ゑたる腹を勵まして
 かの旅人は唯ひとり
 嶮しき山の岨^{きり}道を
 恐れながらもつたひつゝ
 ところある岩角^{いばかど}すぎゆけば
 篝火ちかく燃えぬたり
 上衣^{うはぎ}を赤く照らさせて

火にあたりしは番兵か

劍けんひつさげて立ちあがり

『待てよサクソン何用で

通るぞ名のれ』旅の者』

『何を求むる』他に非ず

一夜の宿と火と食と

道は迷へり疲れたり

霜と嵐に戦ひて

手足はきかず爲りたるよ』

『さばロデリックの友人か』

『いな』さりさては敵ふるか』

『然り敵てきふり敵かたきふり

國亂さんと集めたる

其手の兵は皆敵ぞ』

『やをれ不敵の其言葉

よし獵人の銃銃先に

あたりし鹿は免すとも

さまよふ狐を目の前に

見つゝ誰かは遁すべき

あらぬ名をもて欺きし

間諜しほのもの者もまたしわざ

されど敵より送られし

汝あんぢふらぬは我も知る』

『もごより天の知るころ

ふほ一族の大胆者 いざ立ちあへやロデリック

二人引きつれ我前に

來れ眠のきめん時

世を欺きし證票をば

汝が兜に書きつけん

『我目あやまる事なくは

それふる帯と拍車とは

騎士の記號に非ざるか』

『あらば汝は是に因り

忌むべき敵と我を見ん』

『よし〜座せよ旅の人

我等今宵の食物と

いで〜半を分つべし

我等今宵の臥床とを』

其三

この行き暮れし旅人の

もてふされしは何々ぞ

膳には硬き鹿の肉

火には燥きの好き真柴

夜寒の風を凌ぐべき

上衣はふかば貸されたり

主人は之を上客に

取り扱ひて語り出でぬ

『やよ旅の人われこそは

ロデリック、デューの族ふれ

彼が名譽を傷つけし

言葉を聞かば暫くも

唯にはおかど何時とて

警復すべき我こゝろ

ふほ運命の吉兆を

示す占さへある身ぞや

一たび合圖の笛吹かば

おん身は數多の敵うけん

疲れ臥すとも呼び起し

されど族のためとても 太刀合はせんつとめの義勢あり

我ロデリックのためとても

廉耻はふれて横道に

踏み迷ふべき我ならず

疲れし人を討たんほど

男兒の耻はよもあらど

ましておん身は旅人

いへば汚れぬ名なるをや

一夜の宿と火と食と

こゝろ安めていざ受けよ

明けふばさきの岩まで

遠き關所のかなたまで
 守りの兵をよそに見て
 岩根ふみわけ送るべし
 我みちしるべ致すべし
 それよりさきの關々を
 通る手形は試みよ
 おん身が腰の劍のみ
 『多謝す足下の深情を
 厚き足下の言の葉を』
 『よし〜おん身眠るべし
 あの湖に屢鳴くは
 我等に眠の歌うたふ

千鳥の聲よいぞ床に
 束ねし草のその上に
 上衣はひろく敷かれたり
 二人は艱苦ともにせし
 兄弟の如しなとみて
 氣をゆるされぬ敵とも
 知らぬが如くくつろぎて
 同く臥床にならべたる
 夜の枕に就きにけり
 ふほも夢路は東雲の
 光みそらに見えそめて
 山と水とをむらさきに

色どる頃までつゞけたり

其四

今ぞ目ざめし旅人の

枕におつる曙の色

泡だつ波にきらめきて

凄き山路にほの見えて

ほゝゑむ影はまだ暗き

夜の額を照らしたり

恐れに恵みを與へつゝ

危険に希望を與へつゝ

あの美しくかゝやくは

軍の嵐ふきまよふ

真誠を示す星ならん

夜半も曇らぬ其かけは

其五

朝日は清くうつくしく

森の中までさしこみぬ

客もあるトも諸共に

草の臥床を起き出でゝ

斑に雲の引きわたす

空うちあふぎ祈禱しつ

兵士の朝飯あぶらんど

薪に火をもうつしたり
 事はてしかば山人は
 上衣を肩に打ちかけて
 さびしき森の下道を
 いざ案内しろべにと先に立つ
 山より山になどりきて
 険しき坂路折れゆけば
 下は名高き絶景の
 「テース」「ファース」の流れにて
 谷間を横にうねりゆく
 水のけしきも樂しきを
 ゆく末消えて雲に入る

スターリングの塔までも
 打ちふがめつゝ行く程に
 身はまた森に沈みたり
 見ゆる限の風景は
 遠きところも武士ぶしが
 鎗の長さを出でずして
 道はますく峻岨しづめふり
 足の助けを手に借りて
 岩根いわねふぢしも幾たびぞ
 晝ふほくらき藪くさかけを
 枝うちはらひ分け入れば
 木々のしづくは四方より

雨どふりてぞ降りきたる
 あふおもしろの白玉よ
 美の神ふらで誰か此
 露にまさりてうつくしき
 涙を世には降らすべき

歐米名家詩集中卷 終

明治廿六年十二月廿五日内務省許可
 明治廿七年二月二十日印刷發行

版權所有

國民	壹册(二百頁)金拾貳錢
文庫	六册前金六十七錢
定價	十二册前金壹圓廿五錢
每月一回發兌一ヶ年間二出版完成	錢四册一稅郵

發兌元

東京日本橋區
 本町三丁目

博文館

編輯兼發行者 大橋新太郎

印刷者 近藤圭造

印刷所 近藤活版所

日本橋區本町三丁目八番地
 麹町區飯田町五丁目廿六番地
 麹町區飯田町五丁目廿六番地

英詩和譯 一名ユーニオン 第四讀本詩譯

全一冊洋裝寸珍二百六十頁正價金拾錢郵便稅四錢

本書は公立各學校の教課書たるユーニオン讀本の詩篇を譯述したるものにして、作者は皆歐米の文豪大詩人、泰西小兒の誦吟する所一々之を詳譯し、更に其妙所を指摘して英學生が詩學獨習の便に供せんとす原文玉の如く譯文亦玲瓏水晶の如し、

マスター、オプアーツ、藤精一先生校閲、越山玉波君譯述

大和田建樹先生輯譯

國民文庫

全部拾二卷 每編讀切
洋裝美本
正價 一冊二百頁拾二錢〇六册
前金六拾七錢全十二册前金
一圓廿五錢〇郵稅一册四錢

國民文庫は、明治廿七年に於ける、文學の新天地を開闢するものなり、國民文庫は明治廿七年に於ける、詩學の新知己を紹介するものなり、國民文庫は明治廿七年に於ける、新學史の開拓に奮つて鏃を執るものなり、未だ廿七年の新社會は、又將に既往廿六年の舊社會にあらざらんとす。實に此活動社會と共に一新すべき、文學世界の風潮を卜知すべきは此書あるのみ

本書總目次

- | | |
|---------------|---------------|
| 第一編 歐米名家詩集 上卷 | 第七編 新体日本歴史 下卷 |
| 第二編 歐米名家詩集 中卷 | 第八編 新体萬國歴史 上卷 |
| 第三編 歐米名家詩集 下卷 | 第九編 新体萬國歴史 下卷 |
| 第四編 文學遊戯 上卷 | 第十編 明治文學史 全 |
| 第五編 文學遊戯 下卷 | 第十一編 新体文學 上卷 |
| 第六編 新体日本歴史 上卷 | 第十二編 新体文學 下卷 |

從一位侯爵正親町實德公題辭
從二位伯爵東久世通禧公題歌

佐々木信綱先生著

新明治歌集

第一編 春夏之部

二月十一日發兌

全部六卷 隔月一回發
洋裝美本
正價 一冊(二百頁)拾二錢
〇郵稅一册四錢

花に鳴く鶯、水に住む蛙、いつれか歌を詠せざらん。歌は文學の精華、美術の神髓にして、其高尚優美他に及ぶべきものなし。うべなり、歌人一唱の詠は、天地を動かし鬼神を感せしめ、一世を風動し萬古に傳唱し、神代の昔より明治の今に至るまで、相傳へ相詠したる事。今や文物隆興せる明治の聖代、斯道亦最も盛んなり。此聖代豈に適當の歌集なからざるべけんや。本館さきに千代田歌集三編を出して世の高評を得、前後數版に至りぬ。今又佐々木先生に請ひ、歌數を増し歌題を加へ、全國諸歌人の詠草と募集して、明治歌人の玉詠を網羅せんとす。世の文學に志あつくと和歌に志深き人、速に一本を坐右に備へ、朝夕愛讀せられんことを

- 本書 第一編 春夏之部 二月出版
- 第二編 秋冬之部 四月出版
- 第三編 戀雜之部 六月出版
- 第四編 詠史之部 八月出版
- 第五編 新題之部 十月出版
- 第六編 今様之部 十二月出版

從四位錦鷄間祇候金井之恭先生題辭 音樂雜誌記者百足 登君著

音樂全書

全部六卷 每月一回發兌
每編讀切雅裝
一册(百廿頁)拾錢〇
正價 全部六册前金五十七
錢〇郵便稅一册四錢

第一編 琴曲之葉

二月十日發兌

美術の尤も高妙幽玄なるは音樂にして、能く未開の蠻民より、文明の社會に至るまで愛玩せらるゝものも亦音樂に過ぎたるはなし、本書は現に音樂雜誌記者として、熱心なる音樂改良家として知られたる百足登君の編に成る、和漢洋各國の長技を網羅したる珍書にして一たび之を手にするときは、未だ音樂と習はざる人と雖ども絲竹管絃意に隨て獨學することを得へし

本書	第一編 琴曲之葉 全	第四編 橫笛之葉 全
目次	第二編 尺八之葉 全	第五編 洋樂之葉 全
	第三編 明清樂之葉 全	第六編 胡弓八雲之葉 全